

＜シンポジウム 7＞ALS の研究・治療はどこまで来たか

座長の言葉

座長 コロンビア大学神経内科 ALS センター 三本 博
名古屋大学大学院医学系研究科神経内科学 祖父江 元

(臨床神経, 48 : 965, 2008)

「ALS は難病中の難病」といわれ、原因はほとんど不明、効果的治療もない。しかしこの固定概念を覆す努力が世界先進国で急速に進行中である。ALS 研究の最近の情報量と高質度を 10 年前とくらべてみると格段の差がみられる。日本の ALS への対処法は欧米諸国にみられない特徴がある。すなわち、難病指定疾患としての ALS 患者への治療体制の完備、既存の難病研究班での ALS 研究、またここ十年 ALS 原因・治療解明のための新たな研究班、これらが日本の ALS の治療と研究を推進している。このシンポジウムはその一表現である。青木正志先生は日本で発明・開発された肝細胞増殖因子を如何に ALS 患者の治療へもたらすか、基礎実験、新しいラットモデル、さらに霊長類を通して研究している。神経栄養因子の臨床治験は難しく、米国の利潤目的のバイオテック会社の急

速な研究とは違い、地道な学術的なアプローチが成功への必須条件と思われる。田中章景先生らは孤発性 ALS (sALS) の運動細胞の遺伝子発現を多角的に解析し、dornin および dynactin1 の変性過程関与をみいだし、sALS 研究のために必要な新しいモデルの製作を目指している。吉野英先生は日本での ALS Investigator-initiated Trials の先駆者であり、エタラボンによる ALS の治療開発と最近の治験を通して如何に ALS の効果的治療を可能にするかを提示してくれる。荻野美恵子先生は ALS 患者治療の第一線に立つ臨床家として、ALS の終末期を如何に安寧に過ごせるか、その方法を実際の立場から教示してくれる。

このシンポジウムは ALS の研究・治療はここまで来たことを教えてくれる。